

全国「樋爪会」との深まる交流 総会と樋爪一族の先祖法要に参加

全国「樋爪会」の総会と懇親会が11月20日に、翌日21日が樋爪一族の先祖法要が石川県穴水町のホテルや寺院で行われ、樋爪館懇話会より9人が現地集合・現地解散の行程で参加した。

穴水町は、人口が8,7百人と七尾湾に面し農林魚業が主産業としており、町の中心部には「日詰川」という川が流れており、ここにも「日詰」があるということに何か不思議な縁が感じられた。

全国「樋爪会」の総会と懇親会には、総勢で30数名が参加され遠くは札幌市からの人もおり、令和元年7月7日に紫波町で開催されたサミット「全国の樋爪さん大集合in紫波」に参加された人が多く、懐かしく話に花が咲きました。また、これからも末永い交流を深めるとともに、まだまだ謎に包まれている樋爪祖先のルーツについて、お互いに考証することが話題なるなど盛会裏に終了した。

翌日は樋爪家の菩提寺である来迎寺にて、樋爪八百年忌法要がしめやかに営まれ、法要後、寺の裏山に行き一体が樋爪家一族の墓地があり、その最上段には大正時代の建立で樋爪本家の墓として、能登七尾で一代を築いた第12代樋爪讓太郎の墓が一段と大きく構えられていた。

(本会よりの参加者は、高橋敬明・藤沼和郎・浅沼幸男・熊谷次雄・箱崎勝之・宇部真澄・松田良子・櫻井早苗・八重畑祐見子)



全国「樋爪会」に参加した樋爪会の会員と本会の会員

懇親会には、写真に写っていない穴水町民らが加わり、会の代表者挨拶に続き乾杯を行い、アトラクションや二胡生演奏など楽しい一時を過ごし、再会を期した。



樋爪家本家 第12代樋爪讓太郎の墓

樋爪讓太郎は、大正初期に海運会社大興汽船を起し能登七尾を拠点に活躍す。さらに能登電気社長にも就き、北陸経済の重鎮であった。

五郎沼薬師神社 由緒板を設置

神社施設の改修整備計画として、社殿回廊や幣殿等の改修工事が進められ、さらに常設の旗柱設置と由緒板の新設工事が行われた。

参道入り口に設置された由緒板は、屋根付きの木製で横1.5m、縦1mと大きく、傍の道を通る人も目を引くようなものである。

由緒には、次のような事柄が書かれている。

今から約八百年前、藤原三代の初代藤原清衡の四男清綱の子・太郎俊衡が、国家安穩・武運長久の祈願のために比爪館居城内の大莊巖寺の鎮守社として勤進したのが創記とされる。(中略)

文治5年(西暦1189年)奥州藤原氏の滅亡後も、鎌倉・室町を通じて比爪館の故地である箱清水に所在し続け、藩政時代初頭(西暦1625年頃)、大莊巖寺が盛岡へ移転の際にも、土地神を祀る鎮守社(薬師堂)として故地に残されたものである。(以下略)



新設された五郎沼薬師神社の由緒板

10月20日に開催した第124回例月発表会において、二人の発表者が用いました資料からほんの一部の文面を抜粋して掲載いたします。

金濱興一氏の発表資料「樋爪の変遷と樋爪姓」から □まとめ

- ・「樋爪」という名前は、古来稲作が行われていた所に全国どこにもあったと思われる。律令制が崩壊し、荘園制の時代には天皇家や平安貴族の所有する荘園にまであったことがそれを示している。
- ・現在、「樋爪」の地名が遺っている所は、その昔荘園であったことが推測される。荘園の記録には「樋爪」の名前のみならず、現地の管理者、面積まで記録されている。
- ・長い稲作の中で、源頼朝と平泉が戦った12世紀末～13世紀の記録「吾妻鏡」に、突然「比爪」「火爪」「樋詰」……等が現れ、後の世まで続いている。
- ・それは、荘園の時代が崩壊して武士の時代となり、領地は戦いに勝った者、また命を懸けて戦った家臣のものとなった末に、「樋爪」の名前が消滅していったからである。
- ・「樋爪」が忘れ去られる原因として、開田、開墾の技術が発達して「堰」とか「堤」などに替われ、「樋爪」は古いものになったことも考えられる。
- ・平安時代に漢字から仮名文字が生まれた。女文字と言われる仮名は、漢字よりはるかに表記が簡単で早書きに適している。男性貴族は公の場では漢字を使っていたが、日記などの私的な記録には仮名を使うこともあった。(R3.10.09 岩手日報 歴史学者 倉本一宏) とあることから、樋爪の樋の仮名文字は「比」→「ひ」であることが関係していると思われる。

宮良男氏の発表資料「日本の仏教15」から [日蓮宗]

日蓮宗にかかわった人びと (のうち) 宮沢賢治

詩人、童話作家、農芸化学者、農村指導者、宗教思想家

1896年8月27日父宮澤政次郎、母イチの長男として質・古着商家に生まれる。3歳の頃叔母が「正信偈」「白骨の御文章」を唱えるのを聞き覚え暗唱していた。10歳の頃父の主催する花巻仏教会にも参加した。1914年島地大等訳「漢和対照妙法蓮華経」の中の「如来寿量品」に感銘を受ける。1915年盛岡高等農林学校入学、1920年研究生を卒業、助教授の推薦を断る。

田中智学の国柱会に入信、法華信仰を強め町内を寒修行、浄土真宗門徒の父を折伏しようと口論を繰り返す。1921年1月、無断上京し文信社に勤め、夜は国柱会館で講話を開いた。

4月、賢治と父が宗教対立していることを打破しようと伊勢、奈良、比叡山延暦寺を二人で訪ねた。8月、妹トシの病気で花巻に戻り稗貫農学校の教諭となる。藤原嘉藤治と親交を結ぶ。

1922年妹トシ死亡、真宗大谷派花巻山安浄寺での葬儀には出席していない。

1926年農学校を退職、独居自炊し開墾と文化活動をするが病気で挫折する。

1931年東北砕石工場技師となるが無理がたたって病床の身。

1933年9月21日病死。日蓮宗身延別院身照寺に眠る。

《《12月～令和4年1月 行事予定のお知らせ》》

12月 5日 (日曜日)	第26回 定期講演会	午後1時30分から午後3時30分 会場 赤石公民館 講堂 講師 千葉信胤(のぶたね)氏 平泉文化遺産センター 参与 演題 樋爪と平泉(歴史と伝説の整理) 会費 500円(会員200円)
R 4/1月19日 (水曜日)	第126回 月例発表会	午後7時から午後9時 会場 赤石公民館 講義室 発表者：宇部真澄 テーマ「ある南部杜氏の回想」 発表者：高橋敬明 テーマ「滝名川の砂金」